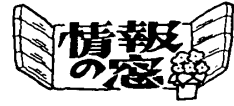


日本応用数理学会・数理ファイナンス 研究部会の紹介



岸本 一男 (筑波大学・社会工学系)

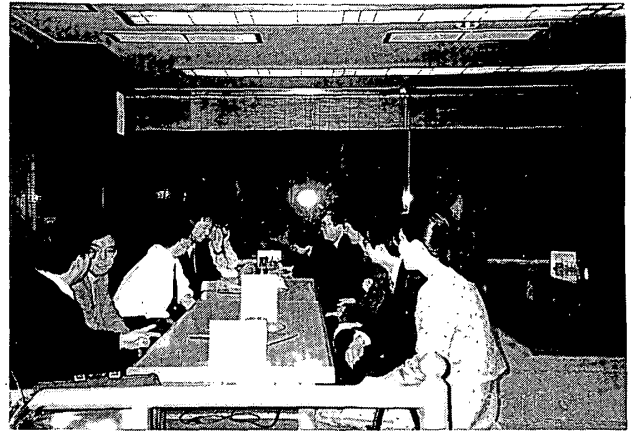
近年のファイナンスの研究は、ポートフォリオ、派生証券の理論等に見られるように、数理計画・確率過程・時系列解析・数値解析等の幅広い知識を前提とする学際的なものに発展してきている。経済学・経営学関係者を中心とする既存のファイナンス研究では、必ずしも数理的な側面に重点が置かれていなかったため、数理的な手法を駆使した研究を発表しても、研究会での討論が十分にはなしえないきらいがあった。

日本応用数理学会の数理ファイナンス研究部会は、数理的に込み入った内容を含む学術的な議論ができる場を提供するためのファイナンスの研究部会である。参加者は大学関係者・企業関係者がほぼ半々と思われるが、そのどちらの関係者の出身を見ても工学系あるいは理学系の学部・学科が大半であり、現在の金融機関での数理ファイナンスが事実上「工学」として機能していることを裏づけているように思われる。

研究部会は1992年に東京工業大学の今野 浩先生を主査として発足してすでに3年を経過している。応用数理学会の研究部会は2年間の時限研究会が原則なので、現在はすでに第2期目にあっており、私、岸本が主査を務めさせていただいている。今野先生がOR学会の研究部会「投資と金融のOR」での初代主査だったこともあり、日本OR学会との「分業」関係もうまくいっているのではないかと考えている。

研究会は、1993年1月に第1回会合を開いて以来、年に4回のペースで部会を開いてきており、原則として木曜日に開催している。「お金に無関係な会」、「手弁当での作業」を標榜して参加費無料の研究部会である。毎回40部程度の子稿を（無料で）準備しているが、これらの作業も関係者の「勤労奉仕」で行なっている。「勤労奉仕」をする人がなくなった時点で消滅する予定であるが、そのころには「袴をつけた研究会」、「がっばり参加費を取る研究会」に衣替えしなおして存続することになるかもしれない。

研究部会の眼目は「オタクっぽく」つまこんだ（願わくは質の高い）議論を行なう所にある。ある程度テーマを決めてオーガナイザーを依頼し、1回3～4件の発表（だいたい1人1時間前後のことが多い）を行なっ



ている。完成した議論のみならず、未完成の議論も歓迎している。ここでの議論が聴衆のみならず発表者にも有益になることを期待しているのであるが、この期待がどの程度に実現しているかは発表された方に伺わなくては判らない。しかし、活発な討論が行なわれていることは、質疑討論の時間がオーバーすることもしょっちゅうであることから納得される。また、研究会の終了後は希望者で（しばしば飲み屋で）酒の入った食事をとり、さらに議論が白熱することも少なくない。「その一端を伝えることができれば」と11月2日に明治学院大学で開催された研究部会後の「食事の様様」を写真にしたのであるが、この回は明治学院大学のならびに会場をお世話くださった西尾先生のご厚意もあって、通常より「高級感」のある会になり、いつもの「場末で議論している」雰囲気伝わらないのはかえって残念ではある。

金銭的・時間的コストをかけたくないこともあって、あまり大々的には宣伝せず、うわさを聞いて参加してくる（オタクっぽい）人を大いに歓迎する会ですので、該当すると思われる方、あるいは「そんな会なら、ちょっと様子を見てやりたい」と思われる方の来聴、ではなく、発言をお待ちしています。